

## 1. テキスト

「内部知覚について」108頁2行目から109頁9行目まで。

## 2 テキスト要約

見る、聞く、考えるといった「働くこと」において「我が真理に帰し、我が実在に帰する」(107頁後ろから1行目)時、即ち「全然我を没し尽して、主客合一となる所に有を見る」(同)。通常、見る、聞く、考えるは主観的自己を立ててこちらから何かを見、聞き、考えることであるが、ここではそれが逆転する。そうした働きが破れたところで「有を見る」のである。聞くについていえば、こちらから自分にとって必要な情報を得ようとして「往きてきく」のが「聴く」であるが、そうした聴き方が破れて思いがけず「聞こえてくる」、それが「聞く」である。蛙が古池に飛び込む水の音に驚いて、静かさが聞こえてくる。その静かさは蛙が飛び込む前から我々に届いていたものであることに目覚める。聞こえてきたもの、それが「有」である。

また見ること聞くことを反省しても、それはすでに対象化された見ること聞くことであり、そこでは自覚は成立しない。そうした見ること聞くことが破れたところに「働くものの自覚」(108,2行目)が成立する。これが「自己自身に同一なるもの」であり「直覚」であり、先に「純なる作用」(106,1行目)と呼ばれたものである。

そうして「有」とは「自己自身に同一なるもの」の外にないとされる。それは一方で「判断の主語」となるものであり、他方で「認識主観」となる。こうしてカントでは「有」ということが認められなかった「認識主観」が「真に実在的」とされる。

この実体にして認識主観でもある「有」について西田は(カントの)認識主観の背後に「スピノザの本体」を認めたいという。スピノザの実体(本体)は「自己原因」と呼ばれる。「自己原因とは、その本質が存在を含むもの、つまり、その本性が存在するとしか考えられないもののことである」(「定義1」)。また「実体とは、それ自身において存在し、それ自身によって考えられるもののことである。つまり、その概念を形成するために他のものの概念を必要としないもの」(「定義3」)であるとされる(『エチカ』)。西田はこうしたスピノザの実体があらゆる存在と認識の基礎となると考える。さらに西田はこうした「有」を無限の形がそこにおいて成立する形なき空間にも例えている。要するに判断以前の直覚、述語以前の主語のことであり、そこから無限の判断と述語が展開されるのである。

## 五

こうして西田によれば「カントの認識主観の背後」=アリストテレスの基体(ヒュポケイメノン)ないし実体(本体:ウーシア)が成立することになる。アリストテレスの実体を実体たらしめているのは形相であった(ソクラテスをソクラテスたらしめている原因は「人間」という形相であるが如くに)。月下の世界では形相は常に質料を伴い、動(キナーシス)の内にあるが、神のみが純粋な形相であり、それは「不動の第一動者」である。自然物の場合、形相は現実活動態(エネルゲイア)として潜在(デュナミス)を現実化する動の原因である。こうした自然物は愛される者が愛する者を動かすように「不動の第一動者」によって動かされる。西田はこうしたアリストテレスの思想を踏まえて、アリストテレスの本体(実体)の考えを徹底すれば「質料なき純なる形相」になると言い、さらにそれは「純なる作用にならねばならぬ」という。この「作用」は「エネルゲイア」のことであろう。そうして「真理の本体は同時に実在の本体」であることが述べられる。真理は認識ないし主観に関わることであり、実在は存在ないし客観に関わることであり、そうして「実体(本体)が推論のアルケーであると同様に生成過程のアルケーでもある」という『形而上学』第7巻第9章(1034a30-31)におけるアリストテレスの言葉を紹介している。

## 3. 哲学的問

そもそも判断以前の直観、述語以前の主語など存在するのだろうか。